

ニコラス・ラヴ 『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』： 水曜日 第十九章—第二十四章

田 口 まゆみ

Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*: part 5

Mayumi TAGUCHI

第十九章 我らが主イエスによって癒された百人隊長の僕と王子（ルカ，7：1-10，cf. マタイ，8：5-13；cf. ヨハネ，4：43-54）¹⁾

我らが主イエスは、病気の僕を癒すためには謙^{しもべ}り，頼まれなくても進んでおいでになりましたが、王子のためには、請われてもお出かけになりませんでした。福音書のこの一節は、わたしたちの傲慢を諫めています。この箇所に触れて [N] 聖グレゴリウスが述べているように [n]，わたしたちは、とかくこの例とは逆に、世間的な評価を受けるため、またご機嫌取りをして現世的な報酬を得るために、金持ち、権力者のもとへは進んで喜んで飛んで行き、仕えるけれども、わたしたちの評判が下がることを恐れるばかりに、貧しい平民のところへは行きたがらず、彼らが本当に助けを必要としていても霊的な報酬のために助けようとはしないものだからです²⁾。

第二十章 屋根から床^{とこ}ごとつり降ろされ、我らが主イエスによって癒された中風の人について（マコ，2：1-12，ルカ，5：17-26；cf. マタイ，9：1-8）

福音書のこの話から、肉体の病はしばしば霊の病，つまり罪が原因となり、霊の病を癒す

平成17年2月15日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部

1) カファルナウムで行われたこの奇跡について、ルカ書、マタイ伝では百人隊長の僕、ヨハネ伝では王の息子となっている。いずれの場合もイエスは病人に会わずに病を癒すが、ルカでは病人の家の近くまで行き、マタイでは家に行こうとする。ヨハネでは「来てください」と請われたが、病人のもとへ赴こうとはしない。

2) 原注：nota contra superbiam mundanorum（この世での驕りに対する注意）

ことがしばしば肉体の病を癒すことになるという例と教えを得ることができます³⁾。我らが主はまず中風の人の罪をお許しになり、それから彼の身体の麻痺を癒されました。

同時にここで、真の信仰の偉大な徳を見ることができます。この中風の人を運んだ人々の信仰が中風の人を救ったように、また直前の章の話で百人隊長の信仰が彼の僕に癒しをもたらしたように、ひとりの人の信仰が他の人を助け救うのです⁴⁾。また、これに続く話では、カナンの女の信仰が、その娘を救いました(マタイ、15：21-28、マコ、7：24-30)。同様に、今でも、洗礼を受けた子が分別のつく年齢に至る前に死んだ場合、その名付け親の信仰により、キリストの力で救われるのです。これは、一部の異端の人々の意見とは真っ向から異なるところです。

第二十一章 我らが主の服の縁に触れ、マルタの病が癒されたことについて (マタイ、9：20-22、ルカ、8：43-48、マルコ、5：25-34)

[N] 福音書は、イエスの服の縁に触れることで病を癒された女の名前を記していません。しかし、聖アンブロジウスその他の博士たちの説明では、マグダラのマリアの妹マルタであったということです⁵⁾。[n]

聖ベルナルドゥスが教えているように、イエスの衣の縁の教えは⁶⁾、いかに徳高い行いをした場合も、本人ではなく、神のみがその行いの主たる行為者であること、それはイエスの服そのものが病を癒したのではなく、その服を着ていた我らが主イエスが癒したのと同じであるということを、全ての従順なる神の僕は、しっかり自覚するとともにはっきりと言葉にして認めるべきであることを示していると考えることができます。

第二十二章 マグダラのマリアの回心について (ルカ、7：36-50、マタイ、26：6-13、マルコ、14：3-9、ヨハネ、12：1-8)⁷⁾

3) 原注：nota de infirmitatibus corporaliibus et spiritualibus (身体と魂の弱さに注意)

4) 原注：de virtute fidei (信の徳について)

5) Ambrose, *De Salomone*, ch.4, PL 17: 698.

6) 原注：fimbria vestimenti domini Iesu (主イエスの衣のふち)

7) 本章はルカ書の記述に最も近い。マタイ、マルコは、女の名前は明かしておらず、罪人としても伝えていない。ヨハネでは、ラザロを墓から蘇らせた奇跡の話に続き、ラザロが宴席に同席しており、女は、ベタニアのマルタの妹のマリアとなっている(ヨハネ、11：2、12：3)。このベタニアのマリアと姦通の女(ヨハネ、8：3-11)そして復活後のイエスが最初に現れたマグダラのマリア(ヨハネ、20：11-18、マルコ、16：9-11；マタイ、28：9-10)は同一の人物であるという解釈が一般的に行われてきたが、福音書の記述によっては証明できない。[なお 'lepros' の訳は新共同訳に従った。]

我らが礼儀正しい主イエスは、ある日、らい病の人シモンから食事に招待されました。主は喜んでこれに応じ、いつものように、食事にこられました。ひとつには礼儀正しいお心からなさったのですが⁸⁾、また、人の魂を救いたいという愛と情熱からされたのでした。というのも、そのために人となられたことはもちろんですが、人々と食事をともにし、温和に人々と睦むことによって、人々を主に対する愛に誘われたのです。また、主は完璧な清貧を貫かれ、ご自身のためにも弟子たちのためにも一切のこの世の富を持たれなかったので、従順の鏡であられた主は、清貧に対する愛からいつでもどこでも従順に、また礼儀正しく感謝しつつ、進んで誘いに応じられたのです。

マグダラのマリアは多分主の説教を前に何度か聴いて主の恩寵に触れ、悔恨の心と主に対する愛を大いにかきたてられたのでしょう、そのシモンの家で主が食事をされると聞き知って、心のうちで自分の罪を激しく悲しみ、また主に対する愛の炎に燃え、いても立ってもいられなくなり、直ぐに、主が食事の席についておられる家にやってまいりました。主の力がなければ救われることも、罪の許しを得ることもできないと考え、その家に入り込み、我を忘れて、他の食事客のことは意に介せず、顔と目を地面に落としたまま、我らが主イエスを求め、内なる愛に燃えてどんどんと主の元に近寄っていったのです。そうして主の足元の地面に身を投げ出し、自分の罪を深く悲しみ恥じ入って、心の中で、いわばこのように考えながら主に語り掛けました。

「我がいとしの主よ⁹⁾、あなたはわたしの神、わたしの主であります。わたしは神に対し多くの大罪を犯し、背きました。わたしの罪は深く、海の砂のように数知れません。でも、主の慈愛は全てを凌駕すると信じています。ですから、あさましく罪深いこのわたしですが、犯してきた罪を心のうちで後悔し、主の慈悲と許しを求めて、主の慈悲に逃れ、主の元にまいりました。心の底から罪を改め、力の限り、二度と主の従順を捨てないと誓います。善き主よ、わたしを遠ざけず、わたしの悔い改めをお認めください。主より他にわたしの拠り所はありません、今後もないと知っています。なぜならわたしは主を何よりも尊く愛していますから。ですから、善き主よ、わたしを見捨てることなく、御心のままにわたしを罰してください。でも、どうぞ御慈悲を賜りますように。」

こうして主の慈悲に偉大なる信頼を寄せ、主を心から愛し、マリアは主の足に口付けし激しく泣いて、主の足を濡らすほどに涙を流しました（このことから我らが主イエスは裸足であられたことがわかります）¹⁰⁾。

8) 原注：nota de curialitate domini（主の礼儀正しさについて注意）

9) 原注：nota verba Magdalene intima（マグダラの心の声に注意）

10) 原注：discalcatus Iesus（裸足のイエス）。裸足のイエスは、フランシスコ会の慣習を反映している。See Sargent, p.274, 91.7.

自分の価値の低さを恐れるあまりに、我らが主の御足を濡らすまでに泣きぬれると、マリヤは、敬虔な心を込めて、自分の髪で主の足を拭きました。彼女は主の足を拭くにふさわしい高価なものを持ち合わせていなかったからで、また、髪の毛で神に背いたことを償うためにも、自分の髪で主の足を拭いたのです。つまり、それまでに傲慢と虚栄のために髪を用いたが、今それを神に対する従順と信心のために用いようとしたのです。さらに主に対する燃える愛と、敬虔の心から、主の足を拭くための布を取りに行くことでその場から離れたくはなかったので、自分の髪で主の足を拭き、その後幾度もその足に口付けし、持ってきた高価な香油を注ぎかけたのです。それは多分、我らが主の御足が道行で痛んでいると考えたからで、さらに内なる信心の心が、恐れのために、まず主の足元から始めさせたからです。彼女は、後にもっと愛に大胆になって、主の頭に香油を注ぎました。

[N] 主なる神よ、この女の行いについて、またその周囲の状況について黙想し、注意を払う者全てが、ここに、内なる罪の悔やみを、そしてイエスへの真の愛と大いなる信心をかきたてられ、多くの霊の果実を見出しますように。[n]

さて、さらに話を続け、我らが主イエスがこの時いかに温和に忍耐強く、彼女のしたいままにおさせになったか注目してみましょう¹¹⁾。主は彼女の内に秘めた愛情と心中の真の愛を知っておりでしたので、彼女の行為も好ましく思われたのです。それでその間中、主は食事を中断されました。他の客も同じように食べるのを止め、その女は誰なのか、なぜそんな変わったことをするのか、またなぜ我らが主イエスがそのように忍耐強く、女のするがままにさせておられるのか不思議に思ったのでした。特にその家の主人シモンは、主がそのように罪深い平民の女が馴れ馴れしく主に触れるのをお許しになるのを見て大いに驚き、その女の何を何も知らないとは、主が預言者であるはずはないと思ったのでした。しかし我らが主は [N] 全ての預言者を越える方ですから [n]、人の心のどんな小さな考えもご存知で、彼の密かな思いにはっきりとお答えになり、主が真の預言者であり、[N] 預言者以上の者である [n] ことをお示しになりました。そして二人の博士の例をあげて、主人が罪深いと知っているその女の行いの正しさを証明し、彼女が彼よりも主を愛していることを証して論駁し、彼女の行いの中に、彼のもてなし全てよりも多くの愛があるという証を示し、そうして全ての徳の完成のみならず罪深い者の弁明も、まず第一に、神への愛に立脚するということを示されたのです。主は、シモンに、「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさでわかる。」(ルカ、7:47) と、説明されました。そして次にマグダラの方を振り向いて、彼女が求めていたものを全てかなえ、「あなたの信仰があなたを救った。安

11) 原注：nota (注意)

心して行きなさい」と言われたのでした（ルカ、7：50）。

ああ、主イエスよ、そのお言葉は彼女にとってなんと甘く好ましかったことでしょうか。彼女が、いかに大きな喜びに包まれて、立ち去ったことか。まことに、それはあまりに嬉しいことだったので、その後ひと時も忘れることがなかっただろうと思います。そうして彼女は完全にイエスに改宗して、完全に罪を捨て、その後一生の間まったく清く正直に暮らし、常に主とその母に寄り添い、決して離れることがありませんでした。

[N]¹²⁾ 以上の話、そしてこの福音書の教えには、わたしたちの教訓とすべき点が大変たくさん含まれています¹³⁾。そのうちいくつかについて部分的に触れましょう。まず第一に、すべての罪深い人々にとって至上の慰めになるのは、我らが主イエスが、そのように速やかに、そのように喜んで、この罪深い女のたくさんの大きな罪と過ちをお許しになることによって、主の終わらない大きな慈悲をはっきりとわたしたちにお示しになったということです¹⁴⁾。主は、心から主の慈悲を願い請う者すべてに対しそのようになさるのですが、[n] ここで重要なのは、この女について主が特にお褒めになった慈愛と真の愛です。愛のみが神と罪深き人間の間の和を取り戻すのであり、使徒が言うとおりの、「愛は多くの罪を覆う」（1ペトロ、4：8）からで¹⁵⁾、愛なく神に喜んでいただくことは不可能なのです。

聖ベルナルドゥスも言っています¹⁶⁾。人の魂の量は、愛の量によって量られ評価されるであろう。つまり、愛の多い魂は優れており、愛の少ない魂の価値は少なく、愛を持たない魂には価値がないのです。聖パウロは、多くの偉大な徳を挙げ説明した後でこのように結んでいます。「愛がなければ無に等しい」（1コリ、13：2）。[N]¹⁷⁾ ですから我らが主は、この女について、愛が大きかったので許しも大きかったと言われたのです。

さらにまたここに、今みたとおりの、この女マグダラに示されたような罪の許しに必要な真の悔悟と悔恨の例があります¹⁸⁾。それは全ての聖教会が教えるとおりの、心の悲しみと、口頭での告白、行いによる償罪によって成立します。

しかし、ここで、口頭での告白は必要ではなく、心の中で神に告白するだけで十分であるというロラード派の間違った意見に従う人があるかもしれません¹⁹⁾。福音書の記述によれば

12) 原注：N（ラヴの加筆を示す）

13) 原注：notabilia（注意点）

14) 原注：misericordia domini（神の慈悲）

15) 原注：caritas hominis（人の愛）

16) 原注：Bernardus super Cantica sermone xxvii°（出典：Sermo in Cantica canticorum XXVII, PL 183:918-19）

17) 原注：N（ラヴの加筆を示す）

18) 原注：vera penitencia pro peccatis（真の悔恨）

19) 原注：contra Lollardos nota de confessione（ロラード派に対する反論：告白について）

この女は何も口には出しておらず、にもかかわらず彼女の罪が完全に許されたからで、これはロラード派の見解の重大な証明になるように見えるからです。

しかし、これに対する理にかなった答えは、こうです²⁰⁾。我らが主イエスに対し彼女は心の中で罪の告白をしたが、主はその時、真の神であり人である者としてそこに実際におられたわけで、言葉にして語られたことが人にわかるように、主には、心のうちの考えも、神格の力によってつまびらかであったのです。福音書にしばしば語られているように、そして特にこの話に明白なように、その女の考えもファリサイ派の人の考えも、主にはつつぬけだったのです。ですからその時、主にとっては、心で思っただけのことも、肉体を持った人にとって言葉に出して言ったことのようにであったのです。今新しい法に照らして、死に至る罪を犯した時は、神としての主にのみならず、わたしたちを罪と霊的な死から買い戻すために人となられた主に背くのです²¹⁾。ですから、神としての主、人としての主の両方に対し罪の償いをする必要があり、真の悔恨により、神であり人である主に、わたしたちの過ちを認め、許しを請わなければならないのです。そしてマグダラの場合とは違い、わたしたちには、今ここに人としての主のお姿がないのですから、神としての主に背いたことは心で悔悟し告白し、人としての主に背いたことは主に告白する代わりに、司祭に口頭で告白しなければならないのです。最低、死に値する罪についてはそうしなければなりません。なぜなら、その罪によってのみわたしたちは主から離され、主が人になることによってわたしたちに与えてくださったあの偉大な恵みを恩知らずにも失ってしまうからです。

ですから、もしわたしたちがもう一度救われたい、以前のように恩寵によって神と結ばれたいと願うなら、神としての主に対してばかりでなく、死をもたらす罪によって否定した人としての主に対しても、述べられているような方法で償罪をしなければなりません。ですから、聖教会が正しく定め、命じるように、わたしたちの罪を言葉で認め、真の告白を司祭に対して行いなさい。司祭は、主が弟子たちに次のように言われた福音書の言葉によって、主が主の代わりに、特に代理人として定めた者です。

つまり、「あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」(マタイ、16:19)のです。

心の中の悔悟のみではなく、できるなら口頭で神の代理人である司祭に告解を行い―神はそれ以上を望まれないのですから―、そしてその後、正しい償罪を行うという、死に至る罪に必要な真の懺悔について、この恵まれた女、つまりここまでの福音書の話にでてきた、一

20) 原注：nota responsionem (ロラード派の見解に対する答え)

21) 原注：nota rationem confessionis vocalis (声に出して告白をしなければならない理由)

度は大変罪深い暮らしをしていたマグダラのマリアに、完璧な例を見ることができます²²⁾。この話は、懺悔の初めと終わりの部分、つまり、悔悟の心と償罪については十分に明白です。第二の告解については女が口に出して告解をしたとは書いてありませんが、それは、我らが主イエスがその場に実際にいらしたということですので、主は彼女の心の中がよくおわかりになり、必要なかったからでした。にもかかわらず、彼女はこの告解と同様の効果を行い、完璧に示したのです。この時女は、主に対してのみ、あるいは主の弟子たちの前だけで、密かに罪人としての自分を顕にし、慈悲を請うこともできたのに、そうはせず、一切の恥を省みず—それこそ告解による改悛の大部を占めることです—一人前で責めを受け、恥を負うことになるかもしれないような場所と時、つまりファリサイ派の人の家、食事の時を選んだのです。彼女は、ファリサイ派の人々が罪深い人を嫌い軽蔑しているとよく知っていましたし、食事の席に現れれば主が大変驚かれることはもちろんのこと、客たち全員が彼女に注目するに決まっています。しかし、自分の罪を責め、恥ずかしいと思う気持ちがあまりに強く、外からの責めや恥のことはすっかり忘れていたのです。そうしてその行いによって、また特に、そのことが人々によって、そして自分が頼りにした方、我らが主イエスによって公然と、その後繰り返して語られるのを聞くことを拒まないという意志によって、女は自分の罪を公に明かしたのです。彼女は、主がことの詳細をご存じなく、だからもし彼女の罪をお許しくださるとしてもその前に、当然、彼女を公然と非難なさるだろうとよく心得ていました。しかし、我らがお優しい主は、恩寵と慈悲にあふれたお方です²³⁾。彼女の心に、正真の改悛と、主が神であり、だから御心にかなえば彼女の罪を完全に許してくださることができるのだという心からの**信心**に根ざした善い意志、さらにまたその結果、主の恩寵と許しを得ることができるという真の**希望**を持ち、また主への燃える**愛**、つまり罪の許しを願う人全てにとって必要な三つの徳をそなえていることを見て取られました。ですから、それ以上の懺悔を要求なさることなく、主は彼女の罪全てを完全にお許しになり、「安心して行きなさい」とおっしゃったのです。この際、「安心して」とは、彼女と神とそして人との間にしっかりと結ばれた良心の和のことを指します。そこに書かれた彼女の真の信頼と信仰、これにしっかりと根ざした希望と愛が、彼女を守ったのです²⁴⁾。ですから、現在また今後いつでも、最も重い罪を犯した人でも、もし彼女のように心に真の悔悟に根ざした**信・希望・愛**を持つならば、守られるでしょう。なぜならば、間違いなく、その時その人は、彼女が神であり人である方

22) 原注：nota de vera confessione Magdalene (マグダラの告白が真正であったこと)

23) 原注：nota fidei spem et caritatem requisitas in contritione vera (真の改悛に必要な**信・希望・愛**に注意せよ)

24) 原注：nota (注意)

にしたように、神の代理としての「人」に、どんな恥も省みず、言葉によって自分の罪を認知するでしょうから。

ただし、中には²⁵⁾、罪を犯した人がこの女に倣って心から罪を悔いるなら、司祭も我らが主に倣って、女の例に示されたように罪人^{つみびと}を許し、そのために罪人が自分で科した以上の償いを求めるべきではないと思う人がいるかもしれません。

この点に関して聖なる博士たちが言うには²⁶⁾、人が罪を悔やみ、反省する力は大変大きく完全なので、それ以上の償いをしなくても、その罪に対する完全な許しを得るに十分であり、もし司祭がこれを完璧に確認することができるなら、司祭は、償いを求めるべきではないのです。とはいえ、人には、神であり人であられる我らが主イエスがされたように人の心を見透かすことはできないので、外に現れた印によって部分的に確認するぐらいしかできないのです。ですから司祭は万全を期して、聖教会が定める基準に応じて罪に対する償いを科すことになります。神の御加護により、全ての罪人がこの女のように心からその罪を悔い改めますように。そうすれば、償いが司祭の科す程度のものであれ、神によりきっと完全な許しを得るでしょう。

先ほどの福音書の話の中で²⁷⁾、さらに、我らが主イエスは、神の言葉を語る説教師のために、^{まこと}真を語るためには、彼らに食物やその他日々の肉体のための糧を提供する人のご機嫌を懸念するあまりに時間を惜しんではいけないという喩えを示しておられます。あのファリサイ人はいつものように主に食事を差し上げていたのですが、それにもかかわらず、主は彼を彼自身の家の中で公然と非難して、彼の信心が不十分であること、またその罪深い女に対して彼が抱いていた侮蔑の心が間違っているということを戒めました。そして彼が大変気分を損なうであろうとわかっていても手加減せずに、彼がそこまで罪深いと思っている女を許し、神に対する愛において彼女のほうが勝っていること、真実の信によって、これを持たない彼ではなく、その女が救われるということをお示しになったのです。

とはいえそのファリサイ人は、このように非難されたにもかかわらず、その後主を食事に誘ったり、主に親切にすることをやめたりはしませんでした²⁸⁾。これとは反対に、今日多くの人は、自分の気持ちや意見に反する真実を示されるや否や、その人がいかに善く、徳高い人であろうと、それを言った人に対する人間的な慈しみや愛を引っ込めてしまうものです。

25) 原注：ratio quorundam (仮定議論)

26) 原注：responsio (答弁)

27) 原注：notabilia pro predicatoribus (説教者に対する注意事項)

28) 原注：nota contra condicionem malam hominum plurimorum (多くの人の悪い状況での過ちを戒める)

そして、まさしくこうした振る舞いによって、自分自身が、どんな立場の人であれ、真実そのものであられるイエスにとって愛に欠ける者であること、このファリサイ人に劣って罪深いこと、よって彼よりも激しい非難、責め苦に値するということを決定付けてしまうのです。しかしながら、こうしたことにもかかわらず、説教師、あるいはその他キリストの人格を代表する霊的な人は、もし真にキリストの家族であるのならば、人の感情を害したり、それで愛顧や一時的な利益を失うことを恐れて、時宜に適って真実を告げることを躊躇することがあってはなりません。そしてとりわけ、過ちに媚を売ったり加担したりすることがないように注意すべきです。それこそ、最も忌まわしいことです。

さらにこの福音書の話において、我らが主イエスは、そのファリサイ人に、女は主の足を涙で洗ったが、主人は足を洗う水も出さなかった云々と、彼はし損なったけれどその女が行った善い行為を論しておられますが²⁹⁾、反対に彼がしたけれど彼女はしなかったことは語られませんでした。わたしたちも、自分を正当化し他の人を責めたいという誘惑に駆られた時に、その人に見出すことができる善い行い、美德について考え、心に留めて、一方自分自身の善行、美德を省みず、わたしたちの及ばなかった点、罪を思い起こすことで、徳高く振るまい、他を許し、そうすることで真の謙譲の美德に益することができるでしょう。謙譲の鏡であらせられる、尊いイエスがわたしたちに謙譲の美德をお与えくださいますように。[n]

ここに洗礼者ヨハネの二章が終わる。

第二十三章 我らが主イエスが井戸のそばでサマリアの女と語られた話（ヨハネ、4：1-42 & 43f.）

さて我らが主イエスがユダヤの地を去りガリラヤへ行かれることになり、サマリアを通らねばなりませんでした。そこにはヤコブの井戸と呼ばれる汲み上げ井戸があり、イエスは旅に疲れて、その井戸辺に休んでおられました。

[N]³⁰⁾ 主なるイエスよ、これはどういうことなのでしょう。真実の道そのものであり、地上の道を全てお創りになった方であるのに、そのように旅にお疲れになるとは。至上のお力によって支え、旅行く者たちを慰めてくださいますのに。しかし、このように人として、飢え、渇き、疲労し、人の生来の弱さすべてを度々お示しになり、主がわたしたちのためにお引き受けになった人としての真のお姿を明らかにする機会を逃すまいとお考えになったので、主のこの世での肉を受けた生は、わたしたちに範例を示すために、ことごとく苦しみと

29) 原注：nota contra propriam iustificationem et aliorum reprobacionem（自分を正当化し他を責めることを戒める）

30) 原注：meditacio（黙想）

苦難に満ちたものでした。主に永遠の誉れあれ。[n]

そうして主は井戸のところに座っておられ、弟子たちは食べ物を買うために隣の町に行っていました。そこへひとりのその国の女が水を汲みに来ました。名をルーシーと申しました³¹⁾。我らが主イエスは、神であられることを彼女に示し、また彼女によって他の者に示されることを望まれ、彼女と長々と崇高な霊的な話をされたのでした。この話には、主と女の会話、弟子たちが帰ってきた時のこと、女の話聞いたその町の人々が主のもとにやってきたこと、そして主をしばらく彼らのところに引き止めたこと、またその後彼らのもとを主が去られてからのことが書かれていますが、それはヨハネによる福音書にはっきりと書かれていますのでここでは省略して先に進みます。

ただし、この話で³²⁾、まず、主が弟子たちを食べ物を買うために町に遣り、一人でおられたことに示された我らが主イエスの大なる従順の証に、[N] また、その買い物には、神の僕にも貨幣を持ち、必要なときのためにそれを保持することが許されるということに注意しておきましょう。[n]

そして、主がそのように取るに足りない女と二人だけで、そのように崇高な事柄についてあたかも大勢の賢者と語るかのように話されたということに、多くの偉大な学者や説教者の高慢、思い上がりが否定され、非難されています³³⁾。そうした人々は、もし彼らの英知をたった一人どころか少数の人に示さなければならなかったら、まったく無駄なことをさせられた、そのような卑しい聞き手は、彼らの高邁・高慢な話を聞くに値しないと考えるでしょうから。

さらにこの話で³⁴⁾、弟子たちが食べ物を主のもとに持って帰り、その井戸のそばで召し上がるようにと言うのですが、ここには、清貧と肉体的苦行の範が示されています。主は、旅に疲れてはおられましたが、そのように町を外れた場所で食事をされ、多分その井戸の水を飲まれました。この時ばかりではなく、度々そのようなことがあったと考えていいでしょう。主は地方を旅される時、そのように町の外、人家から離れた場所の川辺や井戸端で、旅に疲れた身は省みず、清貧と従順をどれほど大事にしておられるか示すために、焼いたり煮たりした様々な食べ物を食すでもなく³⁵⁾、銀や白目製の高価な器を用いるでもなく、あるいは白や赤の上等のワインを召し上がるでもなく、ただ井戸や川から汲み上げた清水とパンとを、

31) 原文 *Lucye*。対応する名の女性が聖書には登場しないので、英語読みのまま記す。典拠不明。

32) 原注：notabilia (注意事項)

33) 原注：contra superbos doctores et predicatoros (学者や説教者の思い上がりを戒める)

34) 原注：exemplum contra gulam (食欲悪を戒める例話)

35) 原注：huc (附)

貧しい者としておとなしく地べたで上がったのです。

さてこの折、弟子たちが食事をどうぞと言った時に、主はまず言われました³⁶⁾。

「わたしにはあなた方の知らない食べ物がある。わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」(ヨハネ、4：32, 34)

そうして主は、サマリアの人々がやってくるのを待ち、まず彼らに説教をされました。主は、食事をされる必要があったのに、まず魂、そして霊の栄養のための行いを成し遂げてから、やっと身体の栄養になる食事をされました。いかに霊の食事に気配りされていたか、おわかりでしょう。[N] そうして説教者や管理者に範を示されたのです。[n]

[N] この福音書には、さらに多くの霊の果実が含まれていますが、もっと詳しく知りたい方は、聖アウグスティヌスがヨハネによる福音書について記した書物をお読みください³⁷⁾。そこでアウグスティヌスは、この福音書の話について詳細に論述しており、それは博学にして霊の果実に満ちています。

しかしここでは、これまでしばしば示されたように、我らが主イエスの清貧について、また禁欲について十分に語りましたので、主御自身と弟子たちの例によって教えられたこれら二つの美德については次章でさらに詳しく述べることにします。アーメン。[n]

第二十四章 イエスの弟子たちが安息日に空腹から麦の穂を摘んで食べた話 (ルカ、6：1-5, マタイ、12：1-8, マルコ、2：23-28)

ある安息日に我らが主イエスの弟子たちが主とともに麦の実った畑を通った時、弟子たちは空腹になったので麦の穂を摘み、手で揉んで食べました。すると [N] いつも主の言動に目を光らせ、彼らが律法に反したところをとらえようとしていた [n] ファリサイ派の人々がこれを見て、主と弟子の両方を責め、安息日にははならないことをしていると言いました。そこで我らが主は、まず律法で例外とされる必要性を根拠に弟子を許されました。[N] ダビデとその供の者たちは、祭司のほかにはだれも食べてはならない供物のパンを必要から食べました。同じ理由でファリサイ派の司祭は安息日に割礼を施し、いけにえを献げましたが、それらの身体的行為は、主の弟子たちの場合ほど必要に迫られていたとは言えません。さらに、その律法の主であり創設者である方がともにおられたのですから、彼らの行為は許されるのです。[n]

36) 原注：exemplum pro predicatoribus et curatis (説教者と管理者のための例話)

37) 原注：Augustinus super Iohannem (出典：In Iohannis Evangelium tractatus CXXIV, PL 35: 1510-22)

ここで内なる心を傾けて³⁸⁾、全能の彼らの主人とともにいながら麦の穂を積んで食べなければならないほど空腹であった弟子たちに敬虔に思いを重ねるならば、当然、清貧を愛し、主のために身体が飢えることを愛したいという気持ちをかきたてられるはずです。特別に高位の使徒として選ばれて、それによってこの世の王、裁き手となった弟子たちが、空腹から生の麦穂を理性のない獣のように食べてしまうほどの貧しさ、困窮に追いやられるとは、考えるだに、驚くばかりのことです。それも全ての食べ物、飲み物を作られた方、全世界の主を目の前にしながら、あたかも主には窮した弟子たちを助けることがおできにならないかのようにです。

しかし善き主は全てのことをわたしたちの救済のためになさったのです。主は、ご自身には罪なく、人間の生理的要求をすべてお引き受けになったように、弟子たちにとっての最善を期してこのように困窮を引き受けるようにしむけられたのです。ですから弟子たちを優しくいとおしみ、同情はなさったけれど、それでも、彼らが困窮すること、それを主への愛のために喜んで耐える彼らの立派な意志が主には好ましかったのです。彼らがそのために良い報いを受けることがわかっていたからばかりでなく、後世のわたしたちの手本となるようにと考えられたためです。ですから特に神への愛ゆえに現世を捨てたわたしたちは、ここに、わたしたちに必要な三つの美德にかりたてる範を得るのです。

それはつまり、肉体的要求に対する忍、完璧な清貧、そして貪食に打ち勝つ禁欲の徳です³⁹⁾。

[N] 第一の徳については⁴⁰⁾、主について行くために持っていたものをすべて捨て去ったイエスの弟子たちが、他の人々には奇跡によって食べ物を与え、また困っている時には助けるのを目の当たりにしてきた主とともにありながら、そのようにひどい空腹にも忍耐強く、進んで耐えたのですから、彼らのように立派でもなく、彼らほど完璧に神を愛しているとも言えないわたしたちは、肉体的要求に窮した時は、もっともっと忍耐強くなくてはなりません。むしろ、^{あやま}過った生き方、我らが主なる神に対する愛の不足ゆえに、主がお与えになるよりはるかに大変な苦行、苦難に値するのでしょうか、しかし、主のために彼らほどの困窮を極めることはないのかもしれませんが。

第二の徳⁴¹⁾、つまり神への愛ゆえの完璧な清貧については、主の完成した清貧が、他の誰が目指した最高位の清貧をも凌駕して、比類ないものであったことを心得なければなりません。[n] キリストへの愛のゆえにこの世のすべての富、名声を捨てた人の清貧は、人の尺

38) 原注：contemplatio 原注：(観想)

39) 原注：nota tria (三つの注意事項)

40) 原注：primum corporalis necessitas (第一の肉の要求)

41) 原注：secundum perfecta paupertas (第二の完璧な清貧)

度での評価に過ぎず、それだけの徳でしかありません。

しかし主の清貧は⁴²⁾、人の非難、軽蔑を買いました。必然的にではなく、自分から進んでそのように貧しく暮らされたということが知られていなかったからです。[N] それは前の話で主と弟子たちが空腹から生麦を食べ、主は彼らを助けなかったことや、その他にもたくさん福音書の中に描かれた主の貧しく困窮したご様子に明らかです。[n] 意志によってではなく、必然によって陥る貧困が軽蔑、非難される中、主を知る人のすべてが、主は家も財もお持ちではないと見てわかったので、人々は主をいっそう蔑んだのです。そのように貧窮した者が一般的に万人から軽蔑され、くず扱いをされたのです。[N] しかしながらそうして清貧の徳の範をたれる者は、主の目には大変立派なのかもしれません。[n] ですから貧しい者を軽蔑するのは大変危険なことです。

[N]とはいえ⁴³⁾、誰が徳高く完璧な貧者かということを知りたければ、清貧の誓いを立て、対外的な所持品のようなこの世の富の一切を捨てた人だけではなく、清貧の誓いを心に秘め、生活に必要なもの以外のすべてのこの世の物、財産を愛さない、望まないと決めた人もいることを知るべきです⁴⁴⁾。

貧しい人がこの世の事物を持たないために外的に困窮すると、内的に不満が募り必要以上のものを望むものです。そのような者は、徳としての清貧を実践しているのではなく、報いのない、哀れな貧乏暮らしに過ぎません。内なる心の欲は、自発的なものだけに、罪を犯したに等しく、清貧がもたらす報いを失うに十分なのです。

ですから完璧な清貧を望む者は、生きるのに必要である以上に持たない、望まないの二つを全うすることです⁴⁵⁾。

この清貧の徳について聖ベルナルドゥスは⁴⁶⁾「降臨についての説教・4」および「キリスト降誕についての説教・4」で語っています。[n]

さらに第三の徳、禁欲について⁴⁷⁾、暴食欲に対してはここに弟子たちの例、またそれ以前に我らが主イエスの例を見ることができます。暴食は悪です。この肉体の中に生きている間は、これに打ち勝つために絶え間ない戦いが必要です。長年の経験から食欲の誘惑に詳しい聖教父たちが教えていますし、特に聖ベルナルドゥスは⁴⁸⁾、様々な箇所でのようにして貧

42) 原注：nota de perfectissima paupertate Christi (キリストの最も完璧な清貧に注意)

43) 原注：nota (注意)

44) 原注：hic (ここに注意)

45) 原注：nota conclusionem (結論)

46) 原注：Bernardus

47) 原注：tercia contra gulam (食欲悪に打ち勝つ第三の徳)

48) 原注：Bernardus in sermone ad clericos, capitulo ix^o (原典 *Sermo de conversatione ad clericos*, ch. 8, PL, 183: 841-42)

食を逃れ、肉体を健全に保つに足るだけの栄養を取るかについて、また、決してそれ以上を求めたり、望んだりしてはならないことを語っています。

ですから、過剰に、つまり欲、願望を満たすために摂取することは自然の限度を越えることで肉体と霊の両面での死にさらされることになります。そうしてしばしば多くの人が肉の欲と願望に負けて⁴⁹⁾、理性を持たぬ獣のように「欲」を「健全」に先行させ、健康に悪い、あるいは後で胸やけして苦しむと知りながら、食べたり飲んだりしてしまいます。すると肉体的に神に仕え、尊い仕事を果たすことができなくなるばかりでなく、霊的に汚れてしまうので、神に命じられたように、清い心で神を見ることができなくなってしまいます⁵⁰⁾。

[N] これはまことに愚かで危険な悪です⁵¹⁾。それにもかかわらず、多くの人がこのことに関して、現実的にまた霊的に、盲目になり、惑わされ、肉体を愛するばかりに、肉欲に駆られ、間違った行動に走り、その結果⁵²⁾、感覚に快くないとしても自然体にとって最も健全なことは揃って避けて、反対に、感覚に好ましく快いとしても最も不健全なものを望んでしまいます。

ですから様々な貪食の中でも、これこそ最も非難すべきものであるように思えます。心にとって悪であるばかりでなく、身体を壊し、死に追いやるからです。

そうして、間違っている、健康に悪いと知りながら、思うままに食べたり飲んだりする人は、神の前で殺人者、それも自分自身の殺人者としての判決、責めを恐れるべし。

好ましいとはしても身体によい食べ物や飲み物を、ふさわしくない時に、あるいは必要以上の量、あるいはががつと貪欲にとるというように、感覚、肉の誘惑に負ける人は、アダムの最初の罪に通じる万人に共通する弱さとして、まだ許されます。

しかし、この暴食欲の悪はどのような種類であっても責められるべきものなので、できる限り避け、我らが主イエスとその弟子たち、また他の聖者たちが教え、範を示したように慎重に禁欲の徳を身につけ、維持する必要があります。身体を維持し、そのために必要なだけ、ふさわしい食物を、ふさわしい労に応じてとりなさい。例えば旅をひかえた馬に対して、餌を控えすぎたために途中で力尽きてしまわないようにしなければならない一方、甘やかしすぎて傲慢になり言うことを聞かなくなってしまうようにしなければならない。適度の禁欲によって分別をわきまえることを教えなければならないのと同じです。この分別について聖ベルナルド

49) 原注：nota contra plures bestiales et gulosos (多くの獣のような暴食の人に対する注意点)

50) Bernard, *Sermo de diversis* XVI, PL 183:580.

51) 原注：N (ラヴの加筆部分)

52) 原注：nota (注意)

ウスは⁵³⁾、一つの徳であるだけでなく、他のすべての徳の導き手であるといっています。それが欠けると、徳と見えることが悪となる—聖グレゴリウスが言うように、分別はすべての徳の母、守護者なのです。

この、禁欲と肉体を維持するために食べることに関する分別は⁵⁴⁾、聖アウグスティヌスが『告白録』で述べているように、おおむね次の点に立脚しています⁵⁵⁾。つまり人は肉体の維持のためにのみ飲食するのであり、それは病気を治すために薬を飲むのと同じであるということです⁵⁶⁾。ですから薬を飲む時に、それ以上あるいはそれ以下のこと、純度が高いとか低いとか、甘いとか苦いとかではなく、痛みや病気を治すための効力のことしか気に掛けないように、空腹や渇きは人の原罪によって生じた人の弱さのですから、この脆弱さに対する薬である食べ物、飲み物は聖アウグスティヌスが言っているように治療としてのみ摂取されるべきです。

以上、本章では、特に禁欲と貪食について、イエスの弟子たちの飢えと質素な食事の例によって語りました。ここで水曜日のためのキリストの尊い生涯の観想に立脚する、本書第三部が終わりますが、この日の話で主はわたしたちへの手本としてまず砂漠での断食から食欲との戦いをお始めになりました。この食欲の悪から、わたしたちは、主の恵みによって、分別ある禁欲で逃れることができますように。イエスは永遠に尊い。アーメン。[n]

ここに第三部、水曜日のための観想を終える。

53) 原注：discrecio. Bernardus super Cantica sermone xliiii° (分別：原典：Sermo in Cantica canticorum XXIII, and XLIX, PL 183:884-94, 1016-20.

54) 原注：item Cantica xxiii° (同書、典拠：)

55) Augustine, *Confessionum libri tredecim*, bk. X. ch. 30, PL 32:797.

56) 原注：nota bene (注意)